段の屋宿 顔朝日記

段の屋宿の樂文（上）
駒太夫と團六（下）

涙にくもる爪しらべ

『增補生寫朝顔話』梗概

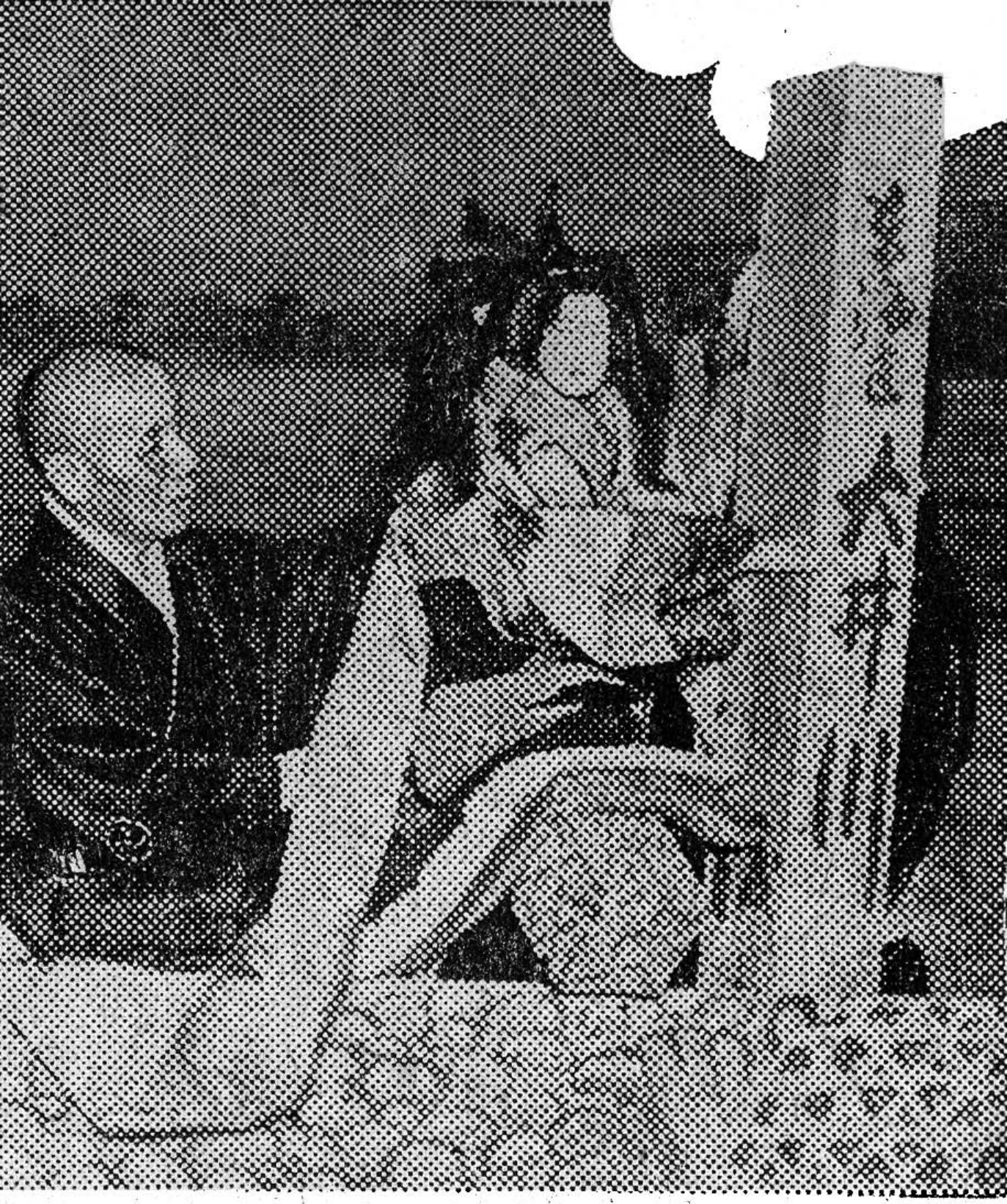
秋月弓之助といふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在住中、宇治の螢狩で宮城阿曾次郎といふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中に秋月一家は急に本國に引上ぐる事となり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で本意ない別れを惜む、その際、深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日のかたみに阿曾次郎の船に投入れて纜を解いた

▽……其後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門と改めて江戸へ出立する、一方歸國した深雪は男の事を忘れかねて本國を出奔して都へ上ると男は去つたので、その行方を追ふ中、盲目となる、駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、島田宿の戎屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する

▽……後でしつた深雪は直ぐと其後を追つたが一足違ひで大井川は豪雨で川止となつたので、失望の結果入水して果てようとした時、戎屋の亭主と下部關助が駈けつけて助け、戎屋の亭主は深雪が祖父の家臣といふ事が解り、駒澤が惠んだ眼藥は甲子生れの人間の生血で調劑すれば癒えるといふので、甲子生れの亭主が切腹してそれが爲めに深雪の眼が開くといふ物語である

▽……今晩は朝顔（深雪）の出へむざんなるかな秋月の……から段切、大井川まで語る、なほこの淨るりは普通「朝顔日記」と呼ばれてゐるが本名題を「增補生寫朝顔話」といひ原作の「生寫朝顔日記」を脚色したものである

○四・八後　淨るり　豐竹駒太夫
三味線　竹澤團六
琴　鶴澤友駒



大井川の深雪……文　樂